東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」

一時保育施設「都立大KIDS」を紹介する動画が完成しました。この動画は、都立大KIDSの概要や実際の保育のようすを紹介するもので、1月下旬に開催が予定されていた「ダイバーシティウィーク」に合わせて公開を予定していました。ダイバーシティウィークの延期に伴い、動画の公開も延期していましたが、この度入園者募集の一環として、ダイバーシティ推進室のWebサイトからご覧いただけるようにいたしました。

園長の吉池先生をはじめとした先生方からのメッセージもありますので、都立大KIDSの利用を検討しているみなさまは、ぜひ一度ご覧いただけますと幸いです。（藤山）

ご利用には事前登録が必要です。詳細はWEBサイトをご覧ください。
東京都立大学ダイバーシティ推進室　一時保育施設のページ
https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/child/index.html

貸出図書のお知らせ

ダイバーシティ推進室では、男女共同参画、セクシュアル・マイノリティ、障がい、多文化理解など、当室の取り組みに沿った内容の書籍を所蔵しています。特に入門的な内容の書籍が多いので、これからダイバーシティについて知ろうとしている方に最適です。来室の際には、ぜひ書架をご確認ください。ダイバーシティ推進室のWebサイトより、蔵書リストをご覧いただけます。また、学生、教職員を対象に、貸し出しもしています。レポートや課題にもご活用ください。

益子特任研究員 着任

この度、新たに障がいのある構成員支援担当の特任研究員として着任しました益子徹と申します。

障がい者福祉を専門としており、自身が大学時代から障がい学生支援に関わってきました。

私自身、社会福祉実践や大学にて講義を受け持つ中で、一人ひとりの「あたりまえ」という感覚を見つめなおすことが求められつつある社会であることを強く感じてきました。まだまだ不慣れなところもありますが、皆さんと一緒にこのようなことについても考えながら歩んで行きたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。（益子）

コラム　ダイバーシティ推進室特任研究員　横山家の育児（最終回）

この連載も今回で最終回です。最後は私と妻のことを紹介します。私は鎌倉市出身ですが縁あって沖縄の大学で学び、聴こえない友達に出会いました。学内の支援活動から、次第に県内大学の支援ネットワークが作られていきました。その仲間の中に彼女もおり、ともに歩く存在になっていきました。

結婚後、私は大学の障がい学生支援担当として働くようになりました。彼女は聴こえない当事者としての問題意識から、自宅を開放して聴こえない子ども達の塾を始めます。二人三脚でお互いに支え合いながら、それぞれの仕事が拡がっていくことを感じるものでした。

しかし、一方で私の実家は寺院と幼稚園を家業としており、いつかは鎌倉に帰ることを考えていました。そんな折、都立大に採用していただきました。妻は生まれ育った沖縄を離れる不安もあったと思いますが、「沖縄でやってきたことは東京でも通じるから」と背中を押してくれました。

そして、この間3名の子どもの妊娠出産があり、2人家族は5人家族となりました。一方で、私の父親が体調を崩し、家業の中でも私の役割が大きくなりました。

都立大でお世話になったこの6年弱は、公私ともに大きな変化の時間になりました。柔軟な働き方と皆さんのご協力が無ければ働き続けることが出来ませんでした。改めて感謝いたします。次はお寺と幼稚園を中心に、私の暮らす街に「ダイバーシティ推進室」をつくる気持ちでやっていきます。

またの再会を楽しみにしています。ありがとうございました。（横山）

編集後記

春は旅立ちの季節です。横山特任研究員が退任されることとなり、これまで力を発揮してくれた学生支援スタッフ達も卒業を迎えます。しかし春は出会いの季節でもあります。これまでの出会いに感謝しつつ、新しいスタッフと共に、明るく風通しの良いダイバーシティ推進室をつくっていければ良いなと思います。（兼子）

東京都立大学　ダイバーシティ推進室
〒192-0397東京都八王子市南大沢1-1　図書館本館1階
電話：042-677-1337（直通）／内線2571　FAX：042-677-1355
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：https://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/
発行日：2021年3月12日
編集・発行

TMU DIVERSITY PROMOTION OFFICE

No.28 March 2021

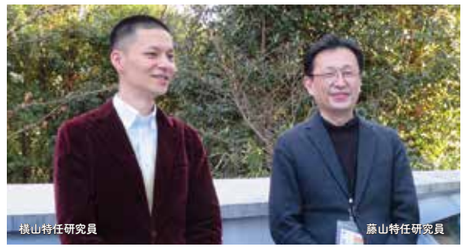
Newsletter
ダイバーシティ通信

TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY 東京都立大学

対談「2020年度の活動を振り返る」

コロナ禍における障がい学生支援の取組み

新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン中心の授業形態になったこともあり、障がいのある構成員支援の取組みも大きく変化することとなりました。この1年の取組みについて、横山特任研究員（障がいのある構成員支援担当）と藤山特任研究員（男女共同参画・多様性を踏まえた構成員支援担当）が振り返りました。



横山　「現在、ダイバーシティ推進室では聴覚障がいのある学生への情報保障が活動の割合としては一番多いのですが、授業が原則オンラインになったことを受けて、支援方法を一から考え直す必要がありました。」

藤山　「前期は専門の団体に情報保障をお願いしましたね。」

横山　「支援する学生も家を出ることができず、オンライン授業における情報保障の仕組みも整っていない状況でしたので、学長室と協力して、専門の団体に情報保障を依頼できたことは、障がいのある学生の学びの保障という点から非常に良かったと思います。」

藤山　「一方で、後期は引き続きオンライン授業が中心でしたが、学生による支援を中心に切り替えて行きました。」

横山　「私自身は前期の情報保障の質が高かったので、後期も継続したいという思いもありました。しかし、持続的な支援環境の構築など総合的な観点から、学生による支援を中心にすることにしました。」

藤山　「前期の終盤から、学生による支援を視野に入れた体制作りが本格化しましたね。」

横山　「前期のうちに学生が専門団体による情報保障の様子を見学することができたのは大きなポイントだったと思います。プロの人たちがどういう風に工夫しながら支援しているのかを見せてもらいながら、質問もできてアドバイスももらえて、学生にとっては非常に役に立ったと思います。」

藤山　「それがモチベーションになった面もありますね。」

横山　「それから助かったのはPEPNet-Japan（日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク）の存在です。各大学でどういう課題があってどんな取り組みをしているかの情報交換ができて、その中でオンラインの遠隔情報保障システムを教えていただき、支援の基本的な体制を固めることができました。」

藤山　「ただ、どうしてもオンラインだから、授業の前後にちょっとした世間話をするとか、支援の振り返りをするとかいった、支援する学生と障がいのある学生とのコミュニケーションが希薄になってしまうという点はありますよね。」

横山　「その点はSlackを使うことで補完しています。授業ごとにSlackのチャンネルを作って、担当者の確認や支援の振り返りなどを行っています。意識して雑談を振ってくれる学生もいて、新しいコミュニケーションの形ができているのかなとも思います。」

藤山　「支援以外の場づくり、何気ないコミュニケーションができる環境づくりはこの1年、私たちも特に意識して取り組んできました。最後に、今後の課題としてはどんなことが考えられますか？」

横山　「対面することが難しい状況の中で、支援に携わってくれた学生、特に新しく入った学生に、ダイバーシティ推進室が大切にしている価値観や雰囲気をどう伝えていくかは課題です。また、コロナの影響でオンライン授業が可能になるなど、社会が大きく変わりました。そうなれば、支援のあり方もその社会に応じて変わっていくものです。オンライン授業が一気に広がったことで、今後支援の選択肢として検討されるようになる可能性も広がりました。社会の変化を見据えながらそれにふさわしい支援のあり方を考え続けることも、とても大きな課題だと思います。」

Contents

1
対談「2020年度の活動を振り返る」
2
横山特任研究員（障がいのある構成員支援担当）退任インタビュー
寄稿「コミュニケーションの多様性」
寄稿「まずは自分が楽しむ！」
3
2020年度「ダイバーシティウィーク」開催延期
障がい者支援スタッフ勉強会
入り口扉のリニューアル
コラム「ダイバーシティとスポーツ」
4
東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」
貸出図書のお知らせ
益子特任研究員 着任
コラム「横山家の育児」

横山特任研究員（障がいのある構成員支援担当） 退任インタビュー

横山特任研究員退任にあたり、聴覚障がい学生の山口さんがインタビューを行いました。

山口　「私が入学する時、初めての聴覚障がい学生支援でしたが、受け入れる時の心境を教えて下さい。」

横山　「聴覚障がい学生支援には人数が必要なので、新たに支援に関わる学生の集まりができることで、ダイバーシティ推進に新たな色を加えられそうだと思っていました。入学を楽しみにしていましたよ。」

山口　「不安や課題は感じていましたか。」

横山　「理系に所属するので、理系授業の情報保障ができるかどうか。そして、日常生活で山口さんが会話に取り残されることが無いように、と思っていました。支援学生の人数については視覚障がい学生支援に関わっていた学生がいたことと、教職員も含めて皆が協力的だったので、それほど心配していませんでした。出身校とも連携が取れていい形でスタートを切ることが出来ました。」

山口　「支援を始めた最初の年に、聴覚障がい学生支援の全国コンテストで新人賞を取りましたが、あの時の気持ちはいかがでしたか。」

横山　「利用学生と支援学生が協力して支援活動をつくり上げることが出来、支援の質も他大学にそん色のないものでしたので、ぜひ参加したいと思っていました。他大学との横のつながりを作ることが出来れば、もう一段階進められると思っていました。あの時は札幌でしたが、視覚障がい学生や、男女共同参画担当の藤山さんも参加し、皆で発表し賞もいただいた一方で、トラブルもあり、打ち上げもあり、珍道中のような楽しさもありました。『チーム』になれたと思いました。」

山口　「横山さんの色は家族団らんの様なアットホームな感じですが、どんな支援活動を目指していたのですか。」

横山　「制度の整備を行いつつも、その制度の枠を越えるような支援活動を展開したいと考えていました。障がい学生の学生生活を考えると制度では補いきれないものがたくさん出てくるものです。そこを含めた支援活動のためには、コミュニティによる支援が必要で、我々が『共同性』を持つことが大切だと思っていました。その意味では制度を利用する学生も役割を持つことが欠かせません。一方的な関係では、支援体制の発展が難しいので、双方向の関係をいかに作れるかがポイントだと思っていました。また、男女共同参画やセクマイの取り組みなど、他分野とのつながりがあったことも、活動に深みをもたらしたと思います。それから、ダイバーシティ推進室が学生の拠点になるように考えていました。様々な企画を立てたり、お茶やお菓子を持ってきたり。皆に来て欲しかったですね。」

山口　「最後に私たちにメッセージをお願いします。」

横山　「シンプルに『やりたいことをやってほしい』です。これ以上の動機はありません。一方で、障がいなどによって、やりたいことが実現できなかったり、ひと手間ふた手間かかってしまう方々がいることも事実です。困難な現実には手を取り合いながら取り組み、皆が伸び伸びと大学生活を送れるように願っています。」

「コミュニケーションの多様性」

中学時代に障がいをもつ部活の後輩をうまくサポートできなかった苦い経験をしたことから、一年生の頃にダイバーシティ推進室の支援スタッフに登録しました。

活動を通して得た一番の学びは、コミュニケーションの方法は多様であるということです。元々、人とコミュニケーションをとることに苦手意識があったということもあり、最初は、自分はまだ手話を覚えていないので聴覚障がいのある方とうまく関われないのではないかと思い込んでいました。ですが、支援活動を重ねていくうちに、紙に文字を書いたり、身振り手振りや口の形で表現したりと、様々な方法でコミュニケーションをとることができるということを実感しました。不安や思い込みによって自分に制限をかけるのではなく、そのときできる方法を用いて勇気を出して他者と関わることで、見える景色は大きく変わるのだと知りました。後輩をサポートしたいけれどどうすればよいのかわからなかった中学生の自分に、その気持ちを素直に本人や先生に伝えて相談するといいよと伝えたいです。

ダイバーシティ推進室で活動できたことは、私にとって大きな財産となりました。ここで学んだことを卒業してからも大切にしていきたいです。

障がい者支援スタッフ
都市教養学部 法学系 4年　髙橋舞帆

「まずは自分が楽しむ！」

「ノートテイク講習会」という学内の張り紙を見て、「ノートの取り方教えてもらえるのかな！」と思い、門を叩いたのが最初のダイバーシティ推進室との出会いでした。

仲間の皆さんが優しかったこと、タイピングの練習をしたいことから、毎週PCテイクに携わらせて頂きました。自分のタイピングが遅く、スムーズなノートテイクができず申し訳ないと思うことも多々ありましたが、仲間の皆さんにはいつも助けて頂きました。「タイピングの遅さはもうどうしようもない！一番重要なのはまごころだ！」と自己肯定感高く参加しておりました（笑）また、利用学生ともっと仲良くなりたいという一心で手話にもチャレンジしました。結局「ビールが最高に旨い」くらいの手話しか覚えませんでしたが（笑）

あまり「支援」をさせて頂いたような気持ちはしていませんが、貴重な経験ができ有難いなあと思いながら楽しませて頂きました。分からないことだらけの私に対し、いつも優しく気さくに手を差し伸べて下さる優しい仲間に恵まれました。

今後新たにご参加される後輩の方々も、肩肘張らず、まずは自分自身が楽しむことから始めて頂けたら嬉しいなと思います！

1年半お世話になり誠にありがとうございました。

障がい者支援スタッフ
都市環境科学研究科 修士2年　末澤瑠里子

2020年度「ダイバーシティウィーク」開催延期

2021年1月18日（月）～22日（金）に開催を予定しておりました「ダイバーシティウィーク」は、新型コロナウイルス感染症の流行を受け、開催を延期することになりました。

ダイバーシティウィークは、ダイバーシティ推進室とその取組の認知向上および理解促進、さらには本学のさらなるダイバーシティの推進を目指して企画されたもので、男女共同参画の推進、障がいのある構成員支援、多様性を踏まえた構成員支援という、ダイバーシティ推進室の取組の3つの柱に沿った講習会やポスター展示、動画の公開、映画の上映会などを行うことを予定していました。

本企画の目玉として、映画『いろとりどりの親子』の上映会を予定していました。この映画は、身体障がいや発達障がい、LGBTなど、さまざまな“違い”を抱える子を持つ300組以上の親子を取材したアンドリュー・ソロモンの『FAR FROM THE TREE』を原作とし、自閉症、ゲイ、小人症など6組の親子を追ったドキュメンタリー作品で、まさに「ダイバーシティとは何か」を知るのにふさわしい内容となっています。

映画の上映会も含め、ダイバーシティウィークは新型コロナウイルス感染症の動向を見極めながら、しかるべき時期に開催できるように準備を続けていく予定です。開催時期などが決まりましたら、ダイバーシティ推進室のWebサイトやTwitter、大学内のポスター掲示などでお知らせします。（藤山）

障がい者支援スタッフ勉強会

2020年12月17日に恒例の支援スタッフ勉強会を開催しました。

今回の講師は藤山特任研究員にお願いし、「まったく役に立たない曲がりくねったキャリアのはなし」というテーマでお話しいただきました。

コロナ禍の下、新たに入学してきた1年生から就職・進学をする学生もいる中で、藤山さんの今までの人生についてお話をいただいたことは彼らにとって役立つ話となりました。自身のしくじり先生のような体験談にも包み隠さず触れつつ、「人生なんとかなるから」「大丈夫大丈夫」と支援スタッフを笑顔で勇気づける声に、Zoom上は終始、笑いの絶えない勉強会でした。

特に、周囲に求められる自己像にはまろうとするのではなく、自分らしさを求めて人生を送ってほしいという前向きなエールは、都立大生全体に届けばよいなと感じられるお話であったと思います。（益子）

入り口扉のリニューアル

南大沢キャンパス図書館1Fのダイバーシティ推進室入口の扉がリニューアルされました。

車椅子に乗った状態でも開閉がしやすい引き戸タイプに変更されたほか、ガラスのスリットが入ったことで図書館のフロアから室内の様子をうかがうことができるようになり、初めて訪れた方でも入りやすい雰囲気になりました。（藤山）

コラム

ダイバーシティとスポーツ ～WEリーグへの期待～

2021年秋、日本初の女子プロサッカーリーグとして「WEリーグ」が開幕します。長く続いた「なでしこリーグ」のさらに上位に位置づけられるリーグが設置されたことで、競技レベルの向上や人気の上昇を期待する声が高まっています。

リーグのオフィシャルWEBサイト（https://weleague.jp/）には、「設立の意義」として「日本の女子サッカーの発展に貢献する」ことや「なでしこジャパンを再び世界一にする」ことよりも先に、「日本の女性活躍社会を牽引する」ことが筆頭にあげられています。また、加盟するクラブには「運営にあたる法人を構成する役職員の50％以上を女性とする」ことや「意思決定に関わる者のうち、少なくとも1人は女性とすること」が求められています。

スポーツの場面においては、女性の指導者が少ないことや、チームや競技団体などで役員など意思決定に携わる女性が極めて少ないことなどが指摘されています。そのような状況において、こうしたWEリーグの試みは、競技力の向上やサッカー人気の上昇といった側面だけではなく、スポーツ界におけるジェンダー構造の改革やスポーツ以外の社会全体における女性の活躍を推進することを目指すものとして、大いに注目に値することと言えるでしょう。

WEリーグの「理念」として、「女子サッカー・スポーツを通じて、夢や生き方の多様性にあふれ、一人ひとりが輝く社会の実現・発展に貢献する」ことが示されています。WEリーグで活躍する女性アスリートがロールモデルとなって、スポーツ以外の場面でも活躍する女性が増える。そんな未来をWEリーグに期待します。（藤山）